

---

# 新しい何かを求めて

虎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新しい何かを求めて

### 【Nコード】

N3896V

### 【作者名】

虎

### 【あらすじ】

俺は子供の頃から魔法の勉強をさせられた

1歳で言葉が理解できるように脳をいじられた  
そして親をも超えた

17歳のある日俺は親を殺した

それ機に俺は異世界を旅しようと決意する。

自分は最初に書いた作品（まだ続いている）にでてくるあるキャラを主人公とした物語です。主人公最強な感じでラブコメはそれほど入らない（予定）

あー、結局転生はしなかったなあ  
世界観は一応つながっています

## 旅立ち（前書き）

これは勢いとノリ・・・ではなくちょっとはまじめに考えてみました  
でもやっぱり会話ばかりでいまいち風景や戦闘の描写が少なくなり  
がちです

・・・まだ戦闘なんてないけど。

少しでも上達していくといいなあ・・・

後世界観は一応つながってるけどこれ単体でも楽しめるように  
しました

## 旅立ち

・・・  
「これで・・・どうだっ」

足元には幾重にも魔方阵が展開されている  
ブワン

そこにひとつの扉が現れた。

「成功か・・・。やっとこの世界からおさらばできる・・・。」  
扉を開け俺は神がいるであろう居場所へ向かう

この世界「ジアルム」では魔法というものが存在する  
人の価値は魔法の優劣で決まる、そんな世界だ  
俺の両親はとても優秀な魔法使いだった  
だが両親は力を求めすぎた

そう、禁止されている魔法・・・禁呪に手を出したのだ  
それで失敗するものかと思うだろう？全部マスターしちまったんだよ  
だがな、そんなことが隠しとおせるわけないだろう？

バレちまったんだよ。当然罰はあった。内容は知らないが  
両親は復讐を誓った。「いつかあの国王を見返す」ってな感じでね

俺は生まれて間もない頃に身体をイジられた

ああ、別に化け物になるとかじゃない

俺は1歳になるころには言葉を理解した

3歳になるころには初歩の魔法は全部使えた

5歳の時にはほとんどの属性を手に入れた

8歳になるころには禁呪まで使えた

11歳で俺はオリジナル魔法を編み出した

13歳で既に親を超えていた

15歳の頃には魔法で転移し誰にも見つかることなく城の地下にある魔法書を読み漁った

当然全部暗記したし、使いこなした。さらには合体させたりそこから新たな魔法を創り出したり

そして・・・

17歳のある日のこと

「さあ・・・私たちのためにあの憎き王を殺して頂戴」

「そうさ、僕たちはそのためにお前を育てたんだ。あいつに思い知らせるんだ・・・」

暴力を振るわれていたわけでもない。どちらかといえば優しいほうだと思っっている

ただ魔法のことに関すると人が変わるだけ

なんでだろう？

その言葉を聞き、気がついたら親は血塗れだった。息はしていない殺した ということを理解するまでに少し時間がかかった

そして俺はある決意をする

ああ、この世界にもう用はないな。異世界ってのがあらししいし旅でもするか

そこに何を求めているのかはわからない。ただ旅をするだけ

そして家の地下で魔方陣を作成し始めたのであった・・・

そこは白い空間だった

と、思ったけどそうでもなかった

ひとつの巨大な城が建っていた

俺のいた世界の城なんて比べ物にならないほどそれは美しかった

「・・・え」

いきなり身体が掴まれた・・・と思ったら何故か俺は椅子に座っている

目の前には同じ年くらいの青年が居た

「それで？君はこの神の領域に如何なる用事があったて来たんだい？」  
俺は答えられない・・・理由なんて特にない。ただあの世界が嫌だっただけ

決意はした。でも理由はない。・・・はあ

「まあこれでも一応神の頂点に君臨する身だ。心を覗くなんて朝飯前だ」

だが、それじゃつまらない。君の口から聞きたいな  
そう言い彼は指を鳴らす

すると突然テーブルとお茶とお菓子が現れる

「まあそんなことはいいさ、それよりスゴイね君。まさかこの世界に独力で来るとわ・・・」

俺はお菓子・・・クッキーを口にする

「・・・」

お茶を飲み続ける

「1歳で言語を理解しちまったんだ。13歳で親を超えちまったんだよ」

にしてもお茶が美味しい。おかわり・・・お、すごい。入ってる  
「俺はある文献を読み異世界の存在を知った。たくさんあるんだってな」

神様は何も言わない。ただ話しに耳を傾けているだけ

「俺は異世界を旅したいんだ。そしてその為にここにきた」  
すう・・・、息を吸い俺は願いを言葉にする。

「俺は異世界を旅したい。だから転生させてくれ！」

彼は魔法書を読み漁るついでに色々な創作作品も読んでいます。なので若干思考がおかしいです。

神様はそれを聞き・・・

「ふむ。君ほどの力があれば独力でゲートを開くことは可能だと思  
うが？」

その通りだ。

「だが・・・ここまで独力で来たんだ。その力は賞賛に値する。い  
いよ・・・だが交換条件だ」

「何を望むんだ？」

「転生はさせないけど君には異世界間を自由に行き来する権限を与  
える」

「それで・・・俺はどうしたらいいんだ？」

「何、簡単なことさ。僕を・・・いや、僕たちを楽しませておくれ」

「・・・は？」

「過去に英雄・勇者と呼ばれた者たちはだいたい何らかの事情でこ  
こに来ている」

「そうだったのか」

「だが君は独力でここまで来たんだ。何を成し遂げるのが楽しみ  
なんだ」

それでいいだろう？ と何もない空間へ問いかける神様

「・・・うむ、大変おもしろそうだ」「・・・」

たくさんの声が同じセリフを同じタイミングで放った

「と、いうわけだ」

神様はこちらに手を向ける

俺とは違った魔方陣を展開する

強烈な光が俺を襲う

「はい、これで準備はできた。さあいつておいで」

「待て、その前に色々聞かねばならない」  
「なんだい？」

俺の質問した内容はだいたいこんな感じだ

- 1 権限を貰ってもどう異世界間を移動するのか
- 2 記憶や魔法は引き継がれるのか
- 3 他に特殊なオプションはないのか？

神様の回答

- 1 念じればいい。
- 2 引き継がれる。
- 3 君の年齢はそのまま。だが本来ならあり得ないほかの世界の能力の習得を可能とさせた

「つまりその気になれば俺は全世界の頂点にも立てるといことか」

「まあ僕たちを除けば頂点だね」

「いいだろう・・・やってやるよ」

こうして俺の旅は始まったのであった



## 旅立ち（後書き）

誤字 脱字などありましたら教えてください  
感想待っています。

## 旅の始まり（前書き）

・・・若干強引な気もするが気にしないで読んでください？

## 旅の始まり

俺は今見知らぬ世界にいる

「これが異世界か・・・」

名も知らぬ国の街を俺は歩いている

(んー、来たはいいけど何もすることないな)  
肩に何かが当たる

「おい、どこ見て歩いてんだ！」

俺と同じくらいの身長 of 奴とぶつかったようだ

「すいません」

「ったく・・・気をつけるよな」

そう言い男は去っていった

(そついえば俺・・・この世界の金持ってねえな)

宿に泊まるにしろ、食料を調達するにしろ金は必要なものである

(仕方ない・・・。この世界なら『ギルド』なるものがあるんじゃないか?)

俺は近くにあった果物屋の店主に尋ねてみる

「ギルド?なんだそれ？」

「どうやらないようだ。」

「んなことより兄ちゃん、これどうだ？」

俺にりんごを渡す

「いや、金がないんで・・・」

すると店主は・・・

「お前さん・・・なら俺の店で働かねえか？」

りんごを俺の手に強引に掴ませる

「俺もなあ、去年嫁さんが死んじまってなあ・・・」

店主はその時のことを語り始める

俺は貰ったりりんごを食べながら話を聞く

「なあに、慣れちまえば楽しいもんだぜ？」

俺はすることもなかったし引き受けることにした

「お願いします」

こうして俺は果物屋で働くことが決まった。

その日俺は店主の家に泊まらせてもらった

「なあに、これから一緒に働くんだ。毎日泊まっててくれてもかまわないぜ？」

そんな店主の言葉に甘えることにした

この世界に来てから数週間経った

店の仕事も最初の頃は大変だったが慣れてしまえば楽なものだ

「よし、今日はおしまいだ。先戻っててくれー」

「いえ、最後まで手伝いますよ。いえ、手伝わせてくださいー！」

「っは、言うようになったじゃねえか。よし、じゃあそっちは任せ

た！」

なんだかんだで充実している

店主は良い人だし、お客さんとも仲良くなった

「こんな生活が送れるなんて思ってもみなかったな」

だが魔法は毎晩こっそり使っている

まあ特訓というわけでもないが腕がなまるの困るしな

だがそんな日常も終わりを告げる

「うわああああ、賊がきたぞおおお」

この街は国の端っこで外へ出れば森が広がっている

こういったことはあってもおかしくない。むしろ今までなかったほ

うが奇跡・・・らしい

「てめえら、持つてるもの全部だせやあ！」

そんな声と共に数人街の中へ入ってくる

街の人々は皆逃げていく

だがそうはさせまいと男たちは男たちはそれぞれの得物を振るう

何人もの人が殺されていく

「バカ！お前もこっちへこい！」

店主が俺に怒鳴りつける

「んだ？うっせえなあ！ぶっ殺すぞ！」

賊が怒鳴りながらこっちへ来る

(余裕で倒せるわ・・・だがなあ・・・)

賊は俺を素通りし、店主のほうへと向かう

「う、うわああああ」

店主の肩を賊の得物が掠る  
肩から血が出ている・・・

(派手な魔法はやめとくべきだ・・・あれでいくか)

俺は掌に小さな魔方陣を展開する

「肉体強化」

掌の魔方陣から身体に魔力が流れ込む

俺の腕の一部に強化時間を示す刻印ができる

これが消えるまでがタイムリミットだ

見た目に変化はない

ただ身体のスベックを一時的に上げるだけの魔法である

普通の魔法使いはあまり使わない

だが俺は禁呪を覚える過程で必要になったのでよく使う

(まあ、これよりも便利な魔法は創り出せたが・・・派手すぎる)

俺はもうひとつ魔法を使う

ブラックアウト

「暗転」

相手の五感を一時的に奪う

俺は賊に向かって走り出す

「これで、どうだっ！」

拳を放つ

体術はそれほど強くない

だが腕の筋力がめっちゃ強くなってるのでただ殴るだけで一般人は  
気絶させれる

賊の身体を強い衝撃が襲う。あ、もちろん五感は返してある。

俺が近づくのがバレなければそれで問題はないからな

「がはっ・・・」

賊は気絶する

「大丈夫？」

俺は店主に話しかける

「うっ……お前なんで……」

「ヒール治療」

店主の傷を癒す

「こ、これは……？」

「他の人には内緒ですよ？」

店主は頷く

「本当は傍観するつもりだったけど……ちょっと賊を退治してきます」

「ああ、やってこい！」

30分後

「ふう……これで全員だな」

あらかじめサーチ索敵を使い人数などは把握しておいた

「よし、戻るか」

同時に刻印が消える

(やっぱり店主には全て話したところかな)  
などと思いつつ俺は家へ向かうのであった

時刻は夜の8時半

二人で飯を食べている

「いやあ、にしてもお前大活躍だったな！」

店主は嬉しそうにそんなことを言う

いつもと変わらない楽しい夕食の風景である

.....

だが俺は話すと決めた。なので話そうと思う

「肩の傷を癒した光については気にならないんですか？」

「そりゃあ気になるさ。だがよお前さんは話したくねえんじゃねえのか？」

店主はコップに入っている酒を飲み干す

「俺あ別に気にしないさ。」

そう言っただけのこップへ酒を注ぐ

「そう言ってもらえるのは嬉しいですけど話すと決めたから。話しますよ」

俺はこの世界の住人じゃないことを話した

どうやってこの世界に来たのかを話した

俺のいた世界について話した

気がついたら時刻は夜の10時

「なるほどなあ」

店主はリンゴをかじりながら話を聞いていた

(商品だけど・・・いいのだろうか?)

「お前さんは旅を再開する気はあるのか？」

「.....はい」

「じゃあ何も言わねえよ。ただいつだって戻ってきてくれていいんだぜ？」

店主はミカンの皮をむきながら話を続ける

「まあ再開するときは一言言ってくれよ」

「わかりました。」

「それじゃあいつてきます」

早朝。俺は店主たちに見送られ街を出る

(・・・昨日あれだけバカ騒ぎしたのによく起きたな)

昨日、俺の旅立ちを祝うという名目で街の人々が集まりお別れ会みたいなものを行った

まあほとんど大人たちばかりか騒いで子供は途中で寝てたが

「それじゃあいつてきます」

「ああ、気をつけるよー！」

俺は再び旅を再会する

(これからもこんなことばかりだといいな・・・)

## 湖と洞窟（前書き）

なかなかうまい表現方法が見つからない・・・

## 湖と洞窟

森の中を歩いている

気がついたらそこには大きな湖があった

「綺麗だな」

綺麗としか言いようがなかった

（でもなんでこんなところに湖が？）

「・・・少し調べてみるか」

俺は足元に魔方陣を展開する

「サーチ探索」

これは索敵とは違う。

索敵は範囲内の生物の数を調べる魔法である

探索は範囲内の環境や建物の数や抜け道のありかなど色々調べられる魔法

じゃあなんで似たような能力が2つもあるのかって話だ

俺も疑問に思っている

小さい頃に両親に質問したことだってある

「ねえ、索敵と探索って似てるのに一緒じゃないのはなんで？」

「2つの魔法の効果を同時に使える魔法があったとしてもね、普通の人じゃ脳が処理できないの」

母親はそう答える

「それに同時にするより精度がいいんだ」

父親はそう言った

そんな答えの意味を理解できずに二重に魔法を展開させたんだ

「サーチ索敵、サーチ探索」

最初の数分は何も感じなかった

だがその後俺の脳は激痛に襲われた

「ぐっ・・・痛い・・・痛い・・・がああああああああああ  
あああああ」

あの時親の言っていることを理解した

そんな過去もあつたな・・・と思いつつ俺は湖周辺と湖の中を調べる

「湖の中に穴？」

俺は穴の中へと意識を集中させる

その穴は一本道である

「・・・ここで何もしないよりはマシか」

俺は探索を終了して休憩をとる

空気の確保などはなんとかなる気がするのでとりあえず荷物だけ別  
空間へしまう

「さて、泳ぐか」

俺は湖の中へとダイブする

そのまま穴の中へと泳ぐ

穴の中は途中で行き止まりになっていた

・・・上から何か視線を感じる

俺は顔を水面から出す

周囲を見渡す

どこかの洞窟の中っぽい

なるほど、洞窟の中の小さな湖に繋がってたのか

「あなた・・・誰？」

水面から顔を出してるだけの俺にいきなり質問をする女性

「人に名を尋ねるときは自分から名乗れって習わなかった？」

「習ってない」

彼も習っていません

そっぴいえば俺名前なんてあつたっけ？

親からはいつも「お前」って呼ばれてて・・・名前？

「名前か・・・そんなもんねえよ」

言ってみた

「・・・」

冷たい視線が俺を貫く

「いや、マジだ。家庭の事情でな。名前なんてもので呼ばれた覚えがなくて」

「ふん。ま、いいわ。」

「それでお前は？」

「私はマリ。恥ずかしいことだけど迷子になちゃって・・・気がついたらここについたの」

とりあえずこの小さな湖から出た

「とりあえず洞窟から出ない？」

「でも道わかんないし・・・」

「探索<sup>サーチ</sup>」

俺は現在地から出口と思われるところまでのルートを探す  
これだな・・・きっと

「とりあえず真っ直ぐ進んで途中で左に曲がって・・・」  
道順をマリに説明する

「・・・多分これでいけるはずだよ。んじゃ行くか」  
マリの手を取り俺は歩く

湖と洞窟（後書き）

あとがき？そんなものなかった  
先にこつちを完結させる予定

## 能力と襲撃

「あー、外に出られた!」

嬉しそうに彼女は叫ぶ

「良かった」

さて、これからどうしよう

行く当てもないし・・・一度店主たちの居る世界へ戻るか?

二人で森を歩く

右と左に道が分かれている

「私はこっちだけど・・・」

「俺はこっちだ」

なんとなくこっちへ行きたいだけだが

「そう。じゃっ、また会えたらよろしくねっ」

「ん、わかった」

俺たちはそこで分かれた

sideマリ

彼は何者なんだろう・・・

あんなところからいきなり出てくるなんて・・・

とりあえず目的地へと急ぐ

2時間ほど歩く

「おい！」

いきなり呼ばれる

「なに？」

男は武器を構えている

「金目の物を全て置いていけ・・・いいか？全てだ」

・・・時々いるのよね・・・

「はいはい、これでいいでしょう？」

有り金を全部ばら撒く

「俺は全てって言ったんだ・・・服もその首飾りも全て置いていってもらおう」

そのセリフと同時に回りから数十人の男たちが木陰から現れる

「・・・最初からそのつもりだったのね」

「何のことかな？・・・やれっ！！」

一斉に襲い掛かってくる

・・・

「<<飛翔>>」

私は能力を発動させる

背中からエネルギーが溢れ出す

そのエネルギーが羽を模かたどっていく

真上に飛ぶ

「チィ・・・能力持ちかつ！」

「そうよ。金をばら撒いた時点で退けば見逃すつもりだったけど・・・

・殺すわ」

私は羽を模るエネルギーを別のエネルギーに変換する

「サンダーショット  
雷羽撃」

まあどういう理屈かはわからないけど念じると変換される

きつと能力っていうのは進化するのだと私は思っている



俺は分かれ道で反対に言った後何かいないか索敵サーチを使って調べた  
・・・あつちの道進めばなんかいたっぽい・・・  
危ないな  
などと思いつつ俺は歩き始める

1時間半ほど歩く

「つ、疲れた・・・」

その場に座り込む

空を見上げた

木がたくさんあってあまり見えないけど雲が微妙に見える

「あー、今日も平和だなあ・・・」

などと考えつつ俺は30分ほど寝転がっていた

「ん？なんだこれ？」

俺はいきなり魔力を感じた

・・・行ってみるか

位置的には斜め前だ

木々の間を走り抜ける



言葉は途中で途切れた

彼らは皆凍ってしまったからだ

「ブレイク  
破壊」

対象に衝撃を与える魔法である

もちろん威力はこちら側で調整できる

彼らを氷ごと破壊した

能力と襲撃（後書き）

んー・・・続き考えてないわ・・・

## 休息（前書き）

さて、設定を考えるぞ！ とか言ってほとんど考えてない俺が通り  
ます

## 休息

マリを助けた後近くの街に転移して、宿をとり、お互い身を休めている

「その・・・助けてくれてありがとう」

唐突にお礼を言うマリ

「気にしなくてもいいさ。偶然だったしね」

まあ、この次にはきつと疑問がくるわけで・・・

「ところで、貴方は一体何者なの？何故別の能力を使えるの？」

能力つてのがイマイチわからない。でもマリにしてみれば魔法というものがわからないんだろっちなあ

だが、説明するだけしてみようと思った

説明を終えた

「な、なるほど・・・興味深いわね」

当然その話をする過程で自分が異世界から来たことも話した

「ま、そういうことだ。時間は気にしていない。不老不死の遺伝子が埋め込まれているからね」

そう、あれは何歳の頃だったかな・・・親が不老不死というものに興味を抱き、それを説明して、俺の身体をいじり・・・ああ、本当口クなことがないなあ

そして軽く雑談をして、飯を食べ、シャワーを浴びて、寝る準備を

する

「ああ・・・今日は疲れたな・・・まさか2つめの世界でこんなことになるなんて・・・」

目標も定まらないこの旅。まず目標を定めようかな

そんなことを考えながら俺は眠りについていった・・・

## 休息（後書き）

短いのは仕様です。

嘘です、次の展開を下手に書かないための措置です。

サブタイトルの『休息』は文字通り俺の休息でもあ……ったりしたら、  
いいなあ……

## 出発準備

「やあ、こんにちわ」

爽やかな微笑とともに一人の青年が目の前に現れる

「こんにちわ」

とりあえず挨拶はしておく

「この人誰？」

マリは小声で尋ねてくる

「そちらのお嬢さんもこんにちわ」

ビクンツと肩を震わすマリ

まあ、そりゃ小声で話してる内容に返事がきてもな

とりあえず、説明しておく

「彼が俺に異世界の間を行き来するよう<sup>キ</sup>にしてくれた神様だよ」

「………」

どうしてここに現れたんだろう？

「いやあ、それはですねえ……」

喋るのをそこでやめ、彼は指を鳴らす

パチンツ

音と同時に白い椅子、白い机、ティーセットが出現する

なんか豪華なのはわかるけど、そういつたことが全くわからない俺には関係なかった

「なに、そちらのお嬢さんが貴方について行きたいとか行きたくないとかで」

……あれか。

実は今朝こんなことがあった

「私も連れてつて欲しい!」

朝食を食べているときにそんなことを彼女は言ってきた

「どうしてだ?」

非常に不思議である

「え、いや・・・その、えっと・・・あれだからだよ?」  
とても拳動不審である

「まあ、ムリなものはムリだ」

「ねえ、本当になんとかならないの?」

「さあ?どうだろうな。少なくとも俺ではどうしようもでき

「ああ、回想とかそういうのは必要ないので」  
本当、人の心を覗くとかいい趣味してるよなあ・・・できないこと  
もないけど

まあ、要するにマリが付いてきたいというわけで

「それで、どうして?」

「いやあ、ここで彼女が貴方の旅に同行すると更におもしろくなる  
かもしれませんからね」

そういやそんなこと言ってたな

「だから、彼女にも異世界の間を行き来する権限をプレゼントしようと思つて」

とても爽やかな笑顔で、優雅にカップに口をつける神様

「え？本当ですかっ!？」

マリの瞳が光の魔法より輝いて見える

「はい、なにせ神様ですから」

絵になる光景である

笑顔の美少女と爽やかな青年

「そこには貴方も入りますからタイトルはもう少し変わりますねえ」

「んー・・・じゃあ『笑顔の美少女と爽やかな青年 + 』でどうだ・  
・・・っておかしいからっ!」

「何の話かわからないけどそれはないと思うよ」

俺が思考を開始するより早くマリが感想を述べる

ちよつと悲しい

「はい、これで終わりましたよ。後の説明はお任せしますね」

そう言つと神様は消え去つていった

「あ、忘れてました。今後このようなことがないとも限らないので、  
これを渡しておきますね」

消えたと思つた次の瞬間にまた出現する神様

俺の手をとり何かの鍵を掴ませる

そして何も言わずに消えていく

夕食後

一通りの説明も終えたのでそろそろ新たな世界へ行く

「それじゃあ行きますか」

「わかったわ」

手をつなぎ俺たちは念じる

『新たな世界への扉よ、開け』

## 出発準備（後書き）

マリの性格とか細かいところは定まってないけど大元は定まっています

## 新たな世界の新たな出会い

「んー、ここは飯がすごく美味しいな」

「うん、美味しいね！」

まあ、世界を巡り始めてまだ間もないが・・・この料理は美味しい！

にしても、自分の居た世界、始めて行った世界、マリと会った世界。この3つと比べてもだいぶ違う所が多いな

まずは家が違う

俺の世界はさておき、家の材料はレンガ(?)っていいのか?そんな感じの石を使っていたはず

だがこの世界じゃ、木が使われている。

「こんなので、雨風防げるのかなあ」

二人並んで街の中を歩く

なんだろう・・・こういうの初めてでいまいわからんけど・・・雰囲気が違う?というか・・・

「まあ、気にしてもしゃあないし、楽しく行こうよ!」

マリはなんだかんだで楽しそうである

「・・・ん、そうだな」

『ハア!』

バシン!

通りかかった建物から大きな音が聞こえる

道を行く人々は当たり前のような顔をしていて、そのまま歩いていく  
「気になるな」

頷くマリを見て俺はその場所に行くことを決意する

「ん、なんだ？見学希望者か？」

面をつけた青年（声で判断）がこちらに話しかけてくる

「まあ、そのようなものです」

「そうか、まあ最近は何騒だからな」

「はあ！」

「甘い！」

「てやあああああ！」

「ふんっ！」

なんか厳しいな

あの青年が子供をめちゃくちゃやってるようにも見えるが……

「なんか……痛そうだね」

だが、子供たちはめげずに練習に励んでいる

「なんか……邪魔しちゃう悪いし……いこ？」

「そうだな……あ、じゃあ帰りますんでー」

空気読めよ俺

「あいよー、でも気をつけろよ。最近は何騒だからな。それじゃあ  
な！」



瞬間、俺と目の前のおっさんの間に影が入る

「花吹雪」

間に入った影が目にも止まらぬ速さ（俺には見える）で剣を振るう  
一瞬の出来事である。

「え？何が起きたの？」

疑問を口にするマリ

剣を腰の入れ物みたいなものにしまつと彼は振り向いて

「はじめまして、俺は海斗。あんたたちは？」

自己紹介をされ、自己紹介を求められた。

「えっと・・・訳あって名前のない者です」

「マリです。えっと、助けてくれてありがとう」

それが俺と海斗の出会いであった

新たな世界の新たな出会い（後書き）

技名考えるのが・・・大変です

## 妖刀

海斗と出会い二日程たった

「なあ、それってなんだ？」

俺は海斗の腰のあたりにある剣を指差し問う

「ああ、刀っていうんだ、ちなみにこれは鞘」  
ほう……

「ちよつと振らせてくれないか？」

「それはできない。こいつは俺の相棒だ。他人には例え一秒であっても渡せない」

などというやり取りをしている間にマリが背後に回り刀に手を伸ばす……

海斗の身体が消える

マリの背後に海斗が出現する

「なっ……」

「マジかよ……」

驚きが隠せない

今回の動きは俺の目にすら映らなかった

「俺の刀に触れようとするやつは例え女子供でも斬る！」

「防<sup>バリ</sup>御陣」

見えない壁がマリを覆う

だが海斗は躊躇いを見せない

「<sup>せんじんは</sup>穿塵破！」

刀をマリ目掛けて突き刺そうとする

パリンッ！

俺の防壁が崩れると同時にマリに刀が触れかける

「<sup>ワープ</sup>  
転移」

俺がマリのもとへ行くのではない  
マリを俺のもとへ転移させる

少し先にある木に大きな穴ができる

「ほう・・・なら、これでどうだっ！」

刀の先から雷が放たれる。

一瞬だが海斗の目が禍々しい赤になった  
それを俺は見逃さなかった

(何か・・・ネタがあるはずだ・・・)

放たれる雷撃を捕獲する。そのまま投げ返す

「うっ・・・これわ・・・」

一瞬とてつもなく不気味な何か俺を襲った

「マリ、飛んでくれ」

「わかった！」

マリの背中から魔力（マリはエネルギーと言っていたがどう考えても魔力）が放出され翼を模る

そのまま俺を抱え地上を離れる

「甘い!」

叫びと同時に禍々しい何かが海斗の身体を覆う

「つく、急げ!できるだけ高く遠くにだ!」

「わかってるわよっ!」

下を見る

この禍々しいエネルギーの元はあの刀であることに俺は気づく

「あの刀を破壊すれば・・・」

海斗の身体が消える

「ふう・・・なんとかなっ・・・」

マリは絶句する

俺たちの目の前に刀を構えた海斗が居るのだから

殺さなきゃ殺される・・・

フラッシュユランス  
「閃光槍」

海斗の背後に光の槍を出現させそのまま突き刺す

「あああああっあああああああああああああ」

海斗が悲鳴を上げる

握られている刀から禍々しいオーラが発せられ、やがてそれが何かを模っていく

『はははははは、いくら宿主を殺しても俺を殺さなきゃ意味なんてないんだよお!』

叫ぶと同時にオーラがごっつごっつ何かになった

海斗や、この世界の住人なら誰もが知っている装備をしている  
鎧を身に纏い、兜を被った何かが出現した

「ほう、それがお前の本体か？」

『はっはははは、そうだ！そして本体の俺に敵う奴なんていねえ  
んだよ！』

おもしろい、仮にもこの世界で最強を謳うんだ。相手にふさわしい  
じゃないか

マリと地上に降り、マリには安全な場所に行ってもらうことにした  
(ま、俺の異空間だがな・・・)

「なら俺は貴様を倒し、全部吐かせてやる」

『はははははは、愚かな人間ごときが俺に勝てると思っている  
のかあ！』

俺とこの刀との戦いはこうして始まった

## 妖刀（後書き）

サブタイがただのネタバレな件について  
ちなみに主人公は「刀」や「鎧」などを知らず、  
当然だが「妖刀」  
なんてものは知らない

**最強を名乗る刀（前書き）**

ノリが違うのは仕様です

## 最強を名乗る刀

戦いは既に2時間以上経過していた

相手の攻撃をかわす

俺は魔法を放つ

だが俺の魔法は斬り捨てられる

『ぬるい！その程度で倒せるなどと思っているのか！』

刀が怪しく光だす

俺は生まれて始めて自分と同等くらいの強いものに出会えた  
そのことに喜びを感じずにはいられない

「世界は・・・広いな」

だが、それでも俺は勝つ

どれだけ強くても俺に倒せないものはない

俺は魔力を掌に集める

周りの空間が歪む

刀を振るう

『薙ぎ払え！炎魔斬！』

何を薙ぎ払う気かは知らないが、ドス黒い何かが炎に混じっている  
そんな炎が俺を襲う

だが俺は焦らない

「呑み込め、ゼリースライム」

足元に複数の魔方陣を展開する

その内のひとつから召喚したモンスターに指令を下す

指令を下されたゼリースライムは相手の攻撃を呑み込む

「そのまま魔力に変換、体内で魔法を構成、それを放て」

更なる指令を与えていく

それを忠実にこなすゼリースライム

『な・・・何が起きた！どこから現れたんだよその怪物！』  
攻撃を放った場所から叫ぶ鎧姿の何か

グニユウウウウウウン

ゼリースライムが光だし、同時に変形していく

そして銃になり、俺の手に収まる

「今回はどんな魔法か楽しみだ」

鎧姿の何かに向けてトリガーを引く

『ハハハハツ、なんだ？失敗か？』

相手は大声で笑っている

「いや、成功だ。後ろを見てみな」

言われた通りに後ろを見る鎧姿の何か

「よし出番だ。お前ら、喰い尽くせ」

残りの魔方陣から色々出てくる

漆黒の狼

蒼い鷲

白銀の獅子

数えることすら愚かしいほどの数のものを召喚する

『卑怯だぞ!』

叫びつつも諦めた様子はない

再び刀を構える

『獣如きが・・・敵うと思うなよ!』

禍々しいオーラが爆発的に増える

『まとめて吹き飛ばしてやるよ!』

刀が巨大化する

『崩牙斬!』

技名がカッコよすぎるんだがこいつ・・・

そんなことを思っている間にも俺の召喚したモンスターたちは次々斬られていく

「転移」

相手の頭上に移動する

そして銃口を脳天に向けて魔法を発射する

ちなみにさつき発射したのは失敗でもなんでもない。  
この位置にコイツを見えない状態で展開しただけである  
もう一度トリガーを引けばその魔法は発動する

「バインド  
鎖縛」

地面に魔方阵が浮かび上がりそこから鎖が大量に出現する  
それが鎧姿の何かを縛っていく

「チイ、動けねえ！」

宙に浮いたような状態  
俺は刀を奪い去る

「ぐっっっ．．．なんだこれわあああああああああああああ  
俺の中に何かが流れ込んでくる  
ダメだ．．．意識が．．．」

「うっっ．．．鞘に刀を．．．おさめ．．．」

そんな声が聞こえた気がした  
海斗の元まで歩く  
俺は海斗の腰にある鞘に刀をしまう

『うわあああああああああああああああああああああ  
悲鳴とともに鎧姿の何かが消滅した  
そして俺の意識を侵食する何かも消えた』

「うっ……」

血を吐き出す海斗

「治癒<sup>ヒール</sup>」

とりあえず一段落したが……なんか疲れた

こうして最強を名乗る刀との戦いに勝利したのであった

## 最強を名乗る刀（後書き）

戦闘の描写がうまくいかないなあ・・・

・・・間違えて向こうのやつに一回投稿したとかいえない  
もしそちらで読んでしまった方がいましたら・・・  
すいませんでした

俺と村正（前書き）

マリがどんどん影になっていく・・・

## 俺と村正

勝利から二日後

海斗が意識を取り戻した

俺たちは小屋の中に居る

海斗とマリは座っていて俺は宙に浮いている

「えつと・・・？あ、そうだ、村正が暴走して・・・え？あなたたちは一体？」

「え？覚えてないの？私たちを助けてくれた・・・」

疑問を投げかけるマリ

なんだろう・・・海斗の雰囲気の前と違うんだが・・・

「いやあ、お恥ずかしい話ですが、色々あつてですね・・・1週間前に意識を乗っ取られたんですよ」

「え・・・じゃあ助けてくれたのは・・・？」

「きつと村正でしょうね」

そうだ、と呟き海斗は俺のほうを向く

「始めまして、妖刀・村正の使い手やつてる海斗という者です」

ぺこりとお辞儀をする海斗

「あ、始めまして」。マリです

「色々事情があつて名前がない者です」

自己紹介を終え俺は本題に入る

「ところでその刀についてなんだが・・・」

「ああ、僕の家の手でしてね。詳しいことは省きますけど・・・」

5分ほどして説明が終わった

「要するに家ではその村正の管理をしていて、長男は刀を受け継ぎ使用する……」

まとめてみた

「まあ……そんな感じですね」

「じゃあなんで村正に意識乗っ取られたの？」

「ああ、それはですね……」

村正を使いこなす修行をしていたら隙をつかれた……ということらしい

「なあ、その修行って何なんだ？」

「この村正を使いこなすということは、封印されている妖怪の力をどれだけ解放した状態で制御できるかってことなんですよ。だからいつもより解放してたらですね……」

宙に浮くのをやめて地面に着地する

「……歴代の中で一番村正に気に入られてるんですよ。だからこういったことはないと思ってた僕の驕りが引き起こしたことです」

『まあ、確かに海斗は今まで一番で気に入ってるがよ……』

刀から声が発せられる

「この声は……」

『よう、2日前は世話になったな』

「なんで喋ってんだよ！消えろ！」

俺は声を荒げた

マリなんかはあの姿がよほどトラウマなのか俺の後ろで震えている

「アレだけはダメ……ごめんね」

何に対しての謝罪かはわからないけ

『おいおい、失礼だな。あれは俺が暴走しただけであって常にあんなってるってわけじゃねえんだぞ』  
刀が宙に浮く

『暴走つてのは封印される前の荒れた状態に近くなることでな、俺の力を解放すると斬りたい衝動に駆られちまってよ。俺を使いこなすってことはその衝動を抑え、解放できる上限を増やしていくことなんだがな。海斗の説明は色々端折られてるな。まあ、俺のこの説明もだいたい端折ってるがな』

「長い。まあ・・・でも最強を名乗るだけの力はあつたな」

『そういうあんたも随分できるじゃないか。あれでも本気じゃないんだろう？』

「いや、本気だったさ、ただ威力の都合上ある程度セーブしないといけないのは事実だがな」

『ほう・・・セーブしないとどれくらいなんだ？』

「まあ・・・大陸ひとつ塵にすることなんて朝飯前なくらいに」

俺と村正の会話は延々と続いていく

「えっと・・・マリさん？でいいですか？あの人は一体？」

海斗は同じく暇そうにしているマリに話しかける

「マリでいいよ、あの人は・・・なんだろうね？私もよくは知らないんだけど恩人なんだ」

ニコニコしてるマリ

「へえ・・・なんか村正に勝ったっぽいんですけど・・・すごいなあ・・・もうあの人に譲ろうかな」

「それはムリだ」

突然話に介入してみる

まあ丁度村正と話していたことだし

「海斗、もしよければ俺たちと旅をしないか？それならお前がどれだけ暴走しても止められる。だから修行の暴走の心配はする必要はない」

『これは俺からの頼みなんだよ。それに俺とやりあえる奴なんてこの世界にやもういねえと思つてたしな。なんでもこいつらは異世界から来たらしいぜ？まだ見ぬ猛者・・・いいねえ』  
なんか興奮している村正

「ま、そんなわけでは海斗次第なんだ。マリは嫌か？」

「んーん、むしろ仲間が増えて楽しいことがたくさんあると思うと・・・大歓迎だよ」

「・・・僕としては行きたいのですが・・・家のこともあって・・・」

『ああ、んじゃあまずは説得にいきますかあ。なに、いざとなったら俺らが暴れりゃどうとでもなる』

俺たちは小屋を出て、海斗の家へと向かう

位置を村正から教えてもらい、そこに転移する

俺は生まれて始めて見るこの建物に驚きを隠せない

マリも同じような感じだ

海斗は当たり前のように門を開く

そう、そこには「こんな広いと掃除大変だろうなあ」とか「え？ここに一家7人がいるだけ？」とか本当色々思わずにはいらなかった

そう、そこにはあったのはそんなことを思わせるくらい大きな建物・

・いや、もうこれは山といっても過言じゃない。  
なんせ隣にある山より大きいのだから

## 家という名の城

「ただいま戻りました！」

門をくぐり、玄関と思わしきところに着き、海斗はそう叫んだが、返事も何もない

『いつもはな、召使とかいるんだけどなあ・・・ま、俺を暴走させたわけだし・・・』

海斗はそのまま家（城）の中を歩いていく

「ただいま戻りました！」

そこは多分俺の家で言う居間みたいなところだと思う  
ただ空気は地下の部屋と似ている

それだけでなんとなく察してしまった

「なんじゃ・・・？」

蔵ついおっさんがこちらに声をかける

「ただいま帰りました」

中央に蔵ついおっさんがいて、その周りに数人いる

「暴走した村正を抑えて戻ってまいりました」

「っは、何を言う。村正を抑えるなどできるわけなかるっ？」

『うつせーよ、お前ごときが俺を抑えることなんて最初から無理なんだよ。海斗は特別なんだよ』

村正のキツイ言葉が飛ぶ

「っな・・・!？」

「まあまあ、そう言うなよ。父さんだって別に怒っているわけじゃないんだ、ただ性格が・・・」

優男が出てきた

『だから、お前らと海斗じゃ俺との相性が最初からちげえんだよ！  
いい加減わかれよ！』

「そ、そこまで言わなくても・・・」

そこから何やら怒鳴り散らす家族たちに必死に対応している海斗

そんな海斗たちを眺めながら俺はマリと喋っている

「ふーん・・・村正を使いこなすことが目的というよりもそれで得る魔力のほう为目的なのか・・・」

「え？どうということ？」

俺は村正と話していた内容を思い出す

『まあ、海斗も薄々感ずいてるんだがな・・・』

そう話かけてきた村正

『アイツの家の奴はな・・・俺を使いこなすことが目的なんじゃねえんだよ』

「あれ？お前さっき・・・」

『ああ、最初からそうだったわけじゃないんだ』

とりあえず話をまとめると

「お前を使っていると身体能力があがったり、靈気が強くなったりする？」

『ま、そんな感じかね。詳しいことは省くが』

さすが呪われた刀。そんな能力まであるとわ

『ま、俺のこと全部知っている奴はもう生きてはいねえよ』

「つまり、海斗にも話をしてないのか？」

『ああ。確かに相性は良いが実力だけで言うなら上の奴はたくさんいる』

「ま、お前も大変なんだな。頑張れよ」

・・・さて、どこらへんをマリーに話そうかな

あんまりこういう黒い話に巻き込むのはな・・・

「ねえ？何で黙ってるの？私なんかした？」

不安そうにこちらを見つめるマリー

「いや、なんでもない。にしてもまだやってるのか」

などと話しているといきなりこちらに優男がくる

「君が村正と戦って勝ったという？」

「はあ・・・そうですけど？」

「そちらのお嬢さんもですか？」

「彼女は違う。全部俺一人だ」

まったく。俺の仲間だからってなんでも巻き込むなよ

などと考えていると俺は放り投げられた

そして海斗の横に着地する・・・いやそこに投げられたのかな

敵ついおっさんが俺をジーと睨む

俺を見定めてるつもりか？

・・・俺は軽く魔力を放出する

多分、この世界の霊気ってのは魔力のことだろう・・・

だがおっさんは何も反応しない

『あー・・・霊気と魔力つてのは別物だわ』

俺の魔力を分析したようだ。本当すげえ刀だ

「お前みたいなのが村正を・・・ねえ」

「ワシはお前さんが本当のことを言っているとは思えなくてね」

「それで?」

「だから、我ら一家を海斗と二人で殺してみせよ」

「なっ・・・!?!いやです!?!」

海斗が声を荒げる

「いいでしょう」

俺は承諾する

「なんでですか!」

海斗はこちらに迫ってくる

(はぁ・・・本気で殺すわけないだろ?気絶させて後で説得するんだよ)

テレバシ  
念話を使い海斗に事情を話す

「さ、そういうわけだから後ろでマリを襲おうとしている優男を止めろ」

そう大きな声で言う

言葉と同時にマリをこちらへ転移させる

「さて、お前らまとめて潰してやるよ」

家という名の城（後書き）

すぐ戦いにもっていけばよかった  
だが後悔はしていない

## 覚醒

「フラックアウト  
暗転」

まずは相手の五感を奪う。これだけしたら後は低級魔法をテキストに放つても勝てる

だが、優男はそんなこと気にせずこちらへ向かってくる  
残りの連中もこちらに向かってくる

「囲まれたよ？」

不安そうなマリ

「マリ、もう一回こっちに入ってもらおうよ」

背後の空間が歪む。マリはそこに自ら入っていく

さて、まずは暗転が効かない原因を・・・

いや、考えるだけ無駄か。効かないなら諦めればいい  
などと考えていたら、海斗は既に村正を振るっていた

「村正、限界まで解放するよ！」

『任せろ』

村正から一気に靈気(?)が増える

あれ？俺何もしなくてもいいんじゃない？

「もらったあ！」

海斗より少し身長が高い女性と、顔が似ている小さい女の子がこちらに刀を向けて走ってくる

ふむ・・・気配は遮断したはずなんだが・・・こりゃ避けるじゃない  
くて防ぐにすべきだな

「プロミネンス  
灼炎」

俺が自在に操れる炎を足元に呼び出す

「防御に3割、残りは手元」

命令を下す

すると炎が俺の周りを囲むように燃える

「うっ……」

炎に触れる寸前にバックステップをする女たち

……ああ、こいつら姉妹か

ま、今更そんなこと気にしたってしょうがない

手元に集まった炎が槍を形成していく　俺は槍を形成した炎にある命令をしておく

周りを囲っていた炎を消す

同時に槍を投げる

「わっ、やったなあ！……って、え？うわあああ」

小さいほうの女に掠った

だがそれで十分である。かすってしまったえば傷口から炎が侵入している。後は体内で一気に燃やすだけ

「なっ……よくもっ！！」

「んな動きで俺に傷がつくと思うなよ？燃やし尽くせ」

足元に残っていた炎が一気に燃え盛る　相手は炎に飲み込まれていた

side 海斗

やっぱり、僕一人じゃ攻撃をかわすので精一杯だ

村正にどれだけ気に入られたって技術がなきゃ意味がないことなんてわかってたのに……！  
歴代の中で一番村正に気に入られてるけど、歴代の中で一番技術がない

「……爪刃衝」そうじんしゅう「……」

同じ技を四方から同時に放ってくる

その場で跳躍する

「殺さないでね！」

だからまた村正を暴走させる

今回は自ら暴走させる。絶対殺さないって信じているから！

村正が光りだす

だが眩しいと感じたのは海斗一人で、残りは何も感じない

そして身体をのつとら………れてない

「あれ？なんで？」

『手に握ってるものを見てみる』

手にあるのは村正……え？

『これが第一段階だ』

そこにあつたのは刀身を紅と蒼に輝かせる刀であつた

『お前が俺を信じたからそれに応えただけだ。今までの連中は俺を抑えたり縛ることはかり考えていて、俺のことを微塵も信じていなかった。それで俺を扱おうって言うんだ。笑えるな。だがお前はそんな奴らの中で唯一俺を信じようとする心があつた。だが家庭環境がそれを許さなかつたから完全には信じていなかった。』

……なんだ、そんな簡単なことだったのか。

『ま、お前の技術の無さは正直俺でも驚いているがな』

「なっ・・・あれが村正じゃと・・・そんなバカな！」  
『っせーな、それにこれだって仮の姿だ、さて海斗、戦う覚悟はできたか？』

「できたよ、さあ戦おう村正」

ヒュン

海斗の横を何かが通り過ぎていく

それを優男・・・海斗の父が素手で受け止める

「なんだい？あの子たちはもう倒されてしまったのかい？まったく・・・」

「あなたの教育が甘いからですよ？」

海斗の母はそう父に言う

すると父の手に握られていた炎の槍が爆発する

「な・・・!?!」

父に何が起きたのか分からないけど、父の身体が燃える  
近くに居た母も巻き込まれる

『ボケツとしてんじゃねえ！今だ！』

村正の言葉に反応すると同時に祖母母にに一撃放つ

「紅刃蒼破」

まずは祖父に斬りかかる

だがその程度で斬られるような祖父ではない

『ふんっ、防ぎきつたつもりかよ！』

祖父の刀が溶ける

そのまま振り下ろす

祖父霊気を練りこんだ炎の熱波が身体を襲う  
寸前でバックステップをしたが祖父は倒れた

そのまま祖母の背後に回り刀を振るう  
どんな風に振ったかなんて覚えてない、ただ振るった後に空間が凍  
てつき、祖母も凍った

「・・・あ、これ生きてるかな？」

『さあな、でもギリギリ生きてるんじゃない？』

海斗はその場に座り込む

「お、終わったか」

背後の空間を歪ませながら彼が声をかけてくれる  
歪んだ空間からは身体よりも先に声が聞こえる

「二人ともおつかれー」

言葉の後にマリは出現する

こうして戦いは終わったのであった

## 勝利 その後（前書き）

ここから数話はいした出来事が起こらないのほほんとした感じな  
話を書きたいと思ってます

## 勝利 その後

俺の炎の槍で死んだと思われていた4人の身体が再生していく  
どういう理屈かは長いから言わないが  
海斗が斬り捨てた2人は俺が再生する

海斗の家族はその後・・・うん、なんでもない

さて、後は海斗に異世界間を移動する権限を与えるだけなんだが・

・ 「ねえ、この鍵ってどうやって使うんだろうね？」

「さあな？そういうマリは何か思いつかなかったか？」

・・・さて、困ったものだ。きちんと説明してけよ・・・

などと考えていたが、鍵がさせる鍵穴を作ってそこにさしたら神様のいるところまでいけました

まあ、神様とご対面してすぐに海斗は異世界間を移動する権限を貰えて・・・

そして俺たちはあれから3つほど世界を巡った  
今は4つめ

どの世界でも争いというものはあった

俺はその争いを止めて、美味しいものを食べて、風景を満喫して、時々絡んでくる奴を倒して・・・

・・・まだ、ハッキリしたわけではないけど、この旅でやりたいことってのが少しずつ定まってきた気がする

今日も海斗の修行に付き合っている

村正は本当にすごいと思う

マリも修行をしている

別にする必要もないと思うけど、仲間はずれは嫌だと・・・  
というわけでマリには召喚したモンスター数匹を相手に戦ってもらっている

にしてもマリの能力は便利だな・・・創れるかな  
まあ、いいか。

とかなんとかやっていたら日が暮れている

そう、旅をしていて知ったんだが、マリはとても料理上手だ  
海斗は手先がすごく器用だし・・・

あれだね、こういうのは何か楽しいね

この楽しい生活がいつまでも続きますように

## 勝利 その後（後書き）

現在、技名募集中です。

漢字にルビが振ってあると嬉しいです

旅での出来事 その1 革命(前書き)

タイトルどおりです。

3、4話はこんなノリです

## 旅での出来事 その1 革命

修行をしながら異世界を転々としているわけだが・・・  
異なった環境で修行をするというのは中々良い

まあ、俺は何もしてないが・・・

確かに近接格闘は少し苦手だが、それ専用に関った魔法もあるしね  
っと、俺のことはどうでもいい

結構な数の世界を巡っている

正直最初はもうちょいスローペースかと思ってたけど、そうでもな  
かった

「ねえ、何考えてるの?」

「ん?なんでもない」

俺たち3人は街の中を歩いている

こないだ、神様のところに行ったついでに少し特典をつけてもらった

移動した先の世界の情勢を完璧に把握する

という特典をね

ま、そんなわけでこの世界について軽く触れておくか

世界は絶対王政である

民は近々革命を起こそうとしている

内通者は数人いる。だが皆、己が王座に座ることにしか興味がない

これくらいわかればいいか  
とりあえず、革命の手助けをしつつ、内通者をなんとかして・・・  
後はこの世界をより良い方向に導ける指導者を探さねば

3週間後

革命は起きた

指導者は見つかっていない

俺は現在単独行動をしている

マリと海斗には目立たない程度に兵士を倒しておいてほしいと頼んだ  
俺は・・・王のいる部屋に転移する

79

「ん？いないのか？」

ドアを開ける

・・・いないな

「サーチ索敵」

・・・

へえ、そういうことが

城の地下

そこはとても暗く、日の光が差し込むようなことも無い  
ただ蝋燭が所々で火を灯しているだけである

ジメジメした空気が嫌だったので軽く空気を調節しといた

現在ある牢の前に俺は立っている

そこにはこの世界で一番偉い王様が居る

そしてその牢の中には数個の白骨死体があった

「おい、お前が王か？」

・・・反応は無い

「現在、この国の王政に満足いかない民が反乱を起こしている」

・・・反応は無い

「なあ、聞いているのか？・・・聞いてないようだな」

仕方ない、心に語りかけるか

念話を少し応用して心に直接語りかける

すると、反応が返ってくる

「・・・まだ、ワシを王と称する者がいるとわな・・・」

王はやつと会話に応じる気になつたようだ

「ワシ・・・俺はこの世界の政治を変えたかつたんだ」

「なら、変えればいいじゃないか」

どこか諦めたような顔をしながら王は言葉を紡ぐ

「それができたらっ・・・できないから俺は・・・クソッ!」

王は俯き、泣き始める

・・・俺は何も言えない

「この世界は腐っている。俺は王座につき初めてそれを知った」  
そこからは俺は何も言えなかった

「王は裏委員会の傀儡で、それをなんとかしたくて・・・でもなんともできなくてっ！父と母は賢明だった。何も言わずただ言い成りになっていった。でも、逆らえばどうなるかを知っていたからで、それを知っていて逆らった俺は愚かで・・・っは、逆らったらこんなところに幽閉されちまってよ。笑えるだろ？俺は絶対王政を変えてきたかったんだ！でも奴らはそれを許してくれない。・・・そんな俺をお前は『王』と称するのか？」  
溜め込んでいたものを吐き捨てるように喋り続ける

「ああ、お前は紛れもなく『王』だよ。その理想をまだ抱けるのならお前は『王』だ。本来ならお前の理想は遂げられていたはずだ・・・今からでも遅くない。お前が望むなら力を貸してやるよ」

さて・・・まずは裏委員会つてのを潰すか

「俺の理想は今でも変わらない！頼む、力を貸してくれ！」  
顔を上げ、叫ぶ王

なんだ、この国を良い方向に導ける指導者なんて探さなくてもここに居たんじゃねえか

俺は、胸を張って応える

「任せろ。・・・さて、まずは裏委員会という組織を解体して、それに通じるものを消すか」

「ま、待て！裏委員会に通じていない者など城には居ないぞ！そうしなければ自分が潰されるんだ。俺以外の白骨死体はきつと逆らった家臣だ・・・」

ということを海斗に話した

裏委員会の本部に一番近いところに海斗たちが居たかたである

というわけでそっちは海斗に任せ、俺は城にいる内通者全員を殺す  
だいたい己の身可愛さで仕えるべき王に刃を向けてる時点で死刑だろ  
・・・めんどいな

「なあ、城ごと破壊していい？もちろんその後すぐ再建するから」  
「ぬ・・・まあいい。大臣などは平民などから雇用すればいいとい  
うし・・・うん、これは俺の中のケジメだ。一思いにやってくれ」

さて、王様の許可も取れたし・・・燃やすか、潰すか・・・迷うな  
全部潰そう

「ディメンショングラビティ  
歪曲、重力」

まあここに更に更に破壊を加えた中級魔法使ってもいいが・・・初級の  
が楽なんだよね

城の地下からは既に転移しており、現在掌に魔力が集まっている  
後はこれを解放するだけで魔法は発動するが・・・

「最後にもう一度聞くぞ？いいのか？」

「良い。これがケジメだ。それにこんな華美でも掃除が大変なだけ  
だ。再建するときはもう少し質素な感じで頼む」

その言葉を聞き終えると同時に解放する

一瞬で消えた

さて、後は再建か・・・

質素というと狭い感じ・・・いや、大きさはもう少し広めにして、  
無駄な装飾を極力消し去り、それでいて栄えるような装飾で・・・

あ、でも親しみやすい感じがいいか・・・んー、悩むな

30分後

やっと図案が決まり、魔法を使い城を創る

その後俺は革命のリーダーのとこまで行き、事情を説明した

最初は半信半疑だったが、城が消えて、少し後に建ったことは知っていたようなので信じさせるために同じものを人形サイズで創ってやった

マリと海斗とも無事合流した

二人とも無傷である

ちなみにどんな感じだったか聞いたら

「村正が結構怒ってたので・・・霊気の波がすごくてですね、一回振るっただけで、ほとんど消えちゃいまして・・・それを抑えるのが大変でした」

マリはマリで修行の成果が出たようである

俺たちは次の世界へ向かう準備をする

これ以上は干渉しない

後はこの世界の奴がなんとかする問題である

まあ、あんないい王様がいるんだ、きつといい世界になってるぞ

旅での出来事 その1 革命(後書き)

シリアスな雰囲気をやってみたかっただけです

## 旅での出来事 その2 食べ歩き

「んー、美味しいな」

現在ある街のとある店で『らーめん』なるものを食べている

ここは食文化がとても栄えていて、俺の世界にあつた食べ物や、その他の世界の食べ物など色々ある

「だねー、すごく美味しいね！」

「そうですね・・・この味噌が入っている『らーめん』はとても美味しいと思います」

ここの世界には結構いる

そして食事の後は異空間（俺が創った）に行き、修行をしている

「んじゃあ、まずはマリからね。いつも通り俺の召喚したやつを倒してって」

俺は数匹召喚する

「マリの実力の3倍くらいの力で戦え」

まあ、それくらいやらないと修行にはならないからね

「海斗は・・・まあ、いつも通り使い魔を従わせた俺と組み手な」

「はい、わかりました。それじゃ行くよ村正？」

『おう、いくぜっ！』

鋼色の刀身が、紅と蒼に変わっていく

「俺も出すか・・・」

そう、俺はこの『刀』というものにとっても惹かれている  
故にこの組み手は俺が技を習うということもある

「勝負！」

「ああ、疲れたあ」

その場に座り込むマリ  
異空間からは出ている  
こっちは既に日も暮れている

「夕飯は何食べよう？」

「僕は白いご飯が食べたいです」

「私は甘いものが食べたいなあ」

「んじゃ、白いご飯と甘いものでも食べに行くかあ」  
マリは立ち上がる

俺たちは少し先を歩いていて、そこまで駆けてくる

ある店にいる

実はこの世界に来て、始めて入ったお店で、結構来ている

「おう、らつしゃい！今日は何食うんだ？」

ここの主人はとてもいい人である

実は何度から料理を教えてもらっている

「んー、俺はこの『カツ丼』っつの」

「私は『てんぷらそば』と、『あんみつ』ってやつ」

「僕は焼き魚定食で、後ご飯は大盛りでお願いします」

「あいよっ、んじゃ少し待っててくれよ」

それぞれ席に座り注文を済ませ雑談を始める

そして3分くらいしたらそれぞれが頼んだ料理が運ばれてきた

「っっいただきます」

俺たちは無言で料理を食べる

話しながら食うのはこういう場では避けるべきかなあと

俺たちは食べ終えた頃に、主人が声をかけてくれる

「おう？今日はいいのかい？」

「はい、そろそろ旅を再開しようと思っていますので」

主人には美味しいものを求めて旅をしているということにしてある  
すると店長は「そうか」と呟き

「んじゃあ、この街を出るときは一声かけてくれや」

「はい、それじゃあこれお代です」

俺は主人に3人分の代金を手渡す

「あいよ、そんじゃな」

それから結局1週間くらい過ごしたが今日この世界を旅立つ

ちなみにこの1週間は修行の時間を減らしたくさんのお店を巡り色々食べてました

『たこ焼き』や『焼きそば』や『クレープ』など、色々食べて、ついでに別世界でも食べるために多めに買って、その食べ物時の流れを凍結して、保存したりと・・・

「いやあ、充実してたね」

「そうですね。とても美味しいものが食べれたし料理も習えたり僕は楽しかったです」

「だな、俺も結構楽しめた。どこの世界もこれくらい平和だといいたんだがな」

ちなみにマリは2日くらい別行動をしていた。

なんでも『肉じゃが』という料理を完璧にしたいとかで・・・

「そういえばマリ。『肉じゃが』ってというのはつくれるようになったのか？」

「できたよっ！師匠からもこれなら問題は無いって言われたよ」

「へえ、そいつは良かったじゃねえか。今度食わせてくれよ」

海斗は何故か俺たちを見ながら少しニヤついていた

「うんっ！頑張るからね！」

笑顔が眩しかった

余談だが次の世界での最初の修行はとてもハードだった

なんでも体重が増えすぎたから・・・？なんか言っていたが覚えては  
はいない

ただマリはとても本気だった

4倍の実力のを倒したし・・・そろそろ6倍くらいにするかあ

旅での出来事 その2 食べ歩き(後書き)

食べ歩きのはずが食べ歩きしていない・・・だと  
まあ気にしないでください

旅での出来事 その3 パーティー（前書き）

今更主人公の居た世界に謎の名前をつけていたことを思い出しました、はい

### 旅での出来事 その3 パーティー

「やあ、よくきてくれたね」

ニコニコしながらこちらに話しかけてくる神様

「ああ、にしても急だな」

「いやあ、思い立ったが吉日というじゃないか」

などと他愛もない雑談をしながら俺は紅茶を飲む

現在神様に呼ばれあの白い空間に居る

・・・白い空間という言い方は少しおかしいかもしれない  
現在この空間は、豪華な装飾が施されている

「えっと、この間はお世話になりました」

マリはペコリとお辞儀をする

「あ、僕も助かりました」

海斗もマリと同じ行動をする

「いえいえ、お気になさらず。彼の旅をサポートするのも暇つぶしのひとつですから」

まったく、人の旅のサポートを暇つぶしで済ませるなんて・・・よほど暇なんだな

「それじゃあ、もう少ししたらこちらに呼びますんで少し別空間に  
いっててください」

言葉と同時に神様は何やら小さく呟く

俺たちの意思は無視かよ！まあいいけどさ

「というわけで、ちょっと俺と戦ってみてくれよ」

なんか雷を纏った青年が突然現れる

見た目は赤い髪に紅い眼。身長は俺くらい

顔立ちには野性的な感じがする？んー、イマイチ表現できないけど・

・まあいいか

「何か用ですか？」

いきなり戦えなんていわれても困る

「だから、お前らあれだろ？アイツに誘われたんだろ？んで待ち時間ここにきたんだろ？だから戦えよ」

「なあ、俺途中までは理解できたんだが最後がちよつと・・・」

「その、私も最後だけ・・・」

『こいつは真性のアホだぞ・・・』

ヒソヒソとこの青年の評価をしていく

「あー、聞こえてるからな？つと、自己紹介がマダだったな。俺は  
トール。一応神様だ」

自己紹介を終え戦おうとするが・・・

「一応とかつけるあたりなあ・・・」

「ですよ、神様ならもう少し自信を持って欲しいです」

「だな海斗。俺もそう思う」

「私は謙虚なだけかと思っただけ・・・」

「マリ、それは錯覚だ」

「だああああ、うっせえな！お前らもう後悔してもおせエぞ！」  
いきなり雷を放つトール

とりあえず同じくらいの雷を放って相殺しておく

「なっ・・・神の放つ雷を相殺だと・・・」

トールは啞然とする・・・が、すぐ次の攻撃を放つ

「しかたない、相手をするか。いいよな？」

「わかったあ」

「ですね、村正！」

『おうよっ、神を一人倒せばお前にとってもプラスになるはずだぜ』

トールは雷を放つ。

はあ、相殺するだけじゃ足りないな・・・貫通させるか  
こちらが魔法を放とうとすると雷が突然消える

次の瞬間海斗が悲鳴を上げる

「うわあああああああああああああああああああ」

雷が海斗の胸を貫通し、地面に突き刺さっている

「なっ・・・槍の形はしていなかったはず・・・あ、消えた瞬間に・・・  
治療ヒール」

「はは、お前の鋭いな。じゃあ次はこれだっ！」

掌を天に向け雷を放つ

次の瞬間俺たちの頭上に雷が降ってくる

「マリ、翼で身を守れ！村正、雷を吸収しろ！」

村正にはできるかわからないけどとりあえず言っておく

『雷を吸うなんて楽勝だぜ！』

「さて、次はこれだあ！」

トールが掌サイズの雷の弾を次々と生み出す

それを・・・なんと食べたのである

纏っていた雷が大きくなる

そして姿が消える

ドンッ

何が起きたのか分からなかった。ただ俺が地面に倒れていてその先にトールが居る

「なんだ、アイツが期待してるから、どれくらいかと思えば・・・これくらいかよ。これなら・・・殺しても構わないか」

拳を放とうとしたらその拳が切断された

「それ以上はさせません！」

海斗がトールの手を切断したのである

「っは、おもしれえ・・・」

『うっせえよ』

海斗とトールが接近戦を演じている最中、マリはこちらに寄ってくる  
「大丈夫？」

心配はありがたいが、海斗のほうに行つてこいよ・・・

「いや、村正さんが『これはコイツにとっていい修行になるから、コイツ一人でやらせてくれ』って・・・」

「そうかあ、じゃあいいか」

side海斗

はあ・・・はあ・・・

やっぱ神様は強い

「おらおらおら、この程度かよ！」

雷を色々な形にして放ち、同時に格闘までこなしている

雷は村正が吸収していくが、それでも雷を刀身に触れさせなければいけない

その隙を神様が逃すはずもなく・・・

『せめて、第三段階くらいまでいってくれれば・・・刀身も長いし何より二刀に・・・』

何やら村正が言っているが気にしている暇は無い

「花吹雪」

お得意の技を使う

飛んでくる雷を全部落としながら神様にも一太刀いれるつもりで剣を振るうが、神様にはあたらす

「紅刃紅破こうじんこうは」

刀身が紅一色に染まり、刀を無尽蔵に振るう  
すると刀身が描いた軌跡が燃え盛る

『空間に干渉してるんだよ』

とか言っていたがいまいちわからない

「はっ！おもしれえじゃねえか！！」

神様がこちらに向かって走り出す  
雷を身体に纏い、手にはいつの間にか創られた刀が握られている

『蒼に切り替える』

言われたとおり、蒼に切り替える

「はあああああああああああああ」

「せーのっ！」

神様の刀がこちらの首を狙っていたのはすぐにわかったので、首に届く前に刀を凍らせ、神様が纏っている雷を一部凍らせる

「凍れええええ！」

凍らせた部分から更に侵食させていく

が、凍っていない部分が多く、神様が少し力を入れただけで凍っていた部分はなくなる

「つと、そこまでですよ？何をしていますかツール？」

僕の背後から声が発せられる

「いやあ、すみませんね。ツール、謝りなさい」

「はあ？俺はこちらの力試しをしただけで・・・」

「ツール？二度言わせる気ですか？」

笑顔がとても怖いです

「うつ・・・俺が悪かった」

『つは、まあいいけどよ・・・』

「にしても君は面白い刀をお持ちのようだ。神の雷を吸い込むなんて・・・ふむ」

神様・・・二人も居ると分かりづらいので戦っていたほうはツールさんと呼ぶことにしましょう

「トール、あれを彼に与えてみてはどうでしょう？おもしろいことになると思いますか？」

「あれ？……ああ、あれか。なるほど、おもしろそうだ」

「これだろ？村正……だっけ？ほれ」

『うおっ、てめえ！何いれやがる！』

「なあに、ちよっとしたご褒美だよ」

『余計なことしてんじゃねえよ！』

「はいはい、二人ともそこらへんでやめてください。後あのお二方は……？」

「俺たちなら先に料理をいただいているぜ？」

どこからか声が聞こえる

「海斗、美味しいから早く戻ってきたら？もう二人で全部食べちゃうよ」

マリの声も聞こえる

「なるほど、自力で戻ってしまいましたか……丁度私はこちらに来る瞬間に向こうに戻ったのでしょうか？いやあ、相変わらずすごい人です」

「っは、褒めたって出るのは魔法だけだぜ？」

「わーい、じゃあだしてー」

あれ？何か二人とも様子が違う気が……  
などと考えているとトールさんが声を荒げ神様に掴みかかる

「おい！お前……俺の秘蔵コレクション勝手に出したのかー！」

「さて？何のことでしょう？」

「ざけんなよっ！！！」

「はいはい、出したのは秘蔵コレクションではなく普通のコレクションですよ」

「だから俺の酒を勝手に出すなどあれほどなあ！」

神様二人の喧嘩です

「つと、海斗君、そろそろ私たちも戻りましょう」

「あ、はい」

『酔ってるのかあの二人は・・・』

「あは・・・」

余談ですけど、僕たちが戻ったら白い空間の装飾は全て破壊されていて、二人は寝ていました

不思議なことに料理はひとつも零れていませんでした

旅での出来事 その3 パーティー（後書き）

あれ？パーティーは？  
ねえ！パーティーは！

旅での出来事 その4 バカンス(前書き)

今回はセリフばっかです

## 旅での出来事 その4 バカンス

海が綺麗なこの世界

俺たちは海に来て、遊んでいる

俺は普通の海パン、マリはピンクのビキニ、海斗は・・・禪である

「海斗お前・・・」

「う、うん・・・ねえ似合う?」

「ん? ああ、似合うよ」

「あれ? 皆さんは禪じゃないんですか?」

『あれ? お前ら禪じゃないのか? へえ、世界は広いな』

ま、まあいいか。泳げればいいしな

「よし、海斗。あのあたりまで競争な」

「はい、わかりました」

「んじゃマリ、合図頼む」

「ん、わかった。位置について・・・ヨーイ、ドン!」

海斗は思ったとおり泳ぎが上手かった。まあ勝ったけど

「さて、こないだツールに何かされてたようだが・・・村正どうだ？」

マリが一人でどっかいったんで、俺と海斗は砂浜に座り込み絵を描いている

『さあ？』

「僕は大丈夫ですけど・・・」

「そうか、ならいいか」

マリのことを忘れ、俺たちはひたすら遊び続ける

時には泳ぎ、時には魔法を放ち、時には水の上を走り・・・

2時間ほどしてから、マリの存在を（村正が）思い出した

「・・・あ、忘れてたわ」

「探しに行かないと・・・」

というわけで探しに行くことにした

まあ、結構可愛いし、水着もピンクだし・・・結論から言つとすぐ見つかった

ナンパをされてる状態で

「やめてくださいー！」

「いいじゃないじゃない、可愛いんだしどう俺らとお茶でも」

「そうそう。大丈夫、奢るからさ」

「ね？別に何か変なことしようってわけじゃないんだ」  
自分の下半身を見てから物申せよアホ

「おい、何してるんだ？」

というわけでそろそろ助けに行く

「もう遅いよ！何やってたの！」

ちよつと怒ってるなあ・・・

「いや、遊んでたけど？マリは何してたのさ」

「ここらへん散歩してたら・・・」

「そっか。それで、こいつらはいつから？」

そこで3人組が俺に齒向かってくる

「なになに？この子俺の彼女なんすけど？やめてくれませんか？」

「そっだよ、この子はコイツの彼女なんだよ」

3人目はただ「はあはあ」している

「と、言ってるけど実際どうなのさ？」

「知らない人だよ？こうやって30分くらい前から・・・」

何故か腕に抱きついてくるマリ

胸は普通のサイズだしそれほど思うことはなかった

「はあ？何言ってるの？お前頭大丈夫？」

・・・

「てか、こっち来いよ」

マリを引っ張る奴

「はあはあ・・・もう限界だああああああ」

いきなり脱ごうとする男

「海斗、スパツとやってくれ」

「わかりました」

村正を使い、男3人の髪を全て斬る

更にそれぞれの股間を蹴つ飛ばす

もちろん普通の状態ではない

少し硬めにして蹴る

「くくくあぐつべ」「くくく」

奇声を上げながらその場で悶える男3人組・・・キモいな

「海斗、どう思うよ?」

「か弱い女子に無理強いとは・・・許せません」

「だろう?」

「僕としてはもう少しキツイお仕置きでも構わないと思いますけど」

「くくくヒイヒイ」「くくく」

「さて・・・次手を出したら・・・ね?」

笑顔を忘れちゃいけない

「ですね、次は手が滑って髪じゃなくて頭を斬るかもしれませんし・

・・・」

「くくくす、すいませんでしたああああああ」「くくく」

男たちはどこかへ逃げていった

あの痛みの中走れるとは・・・

「「すいませんでした」」

今度は俺たちが謝罪をする番である

「いや、いいよ別に。それに助けに来てくれたし」

「「ありがたきお言葉」」

もうノリが完璧におかしいな俺と海斗

『ま、嬢ちゃんの気もすんだなら・・・海斗、ちょっと飯でも買いにいくぞ』

なんだかんだで日は暮れている

「そうだね、じゃあ僕ちよっと買ってきますけど、何がいいですか？」

「んじゃあ俺はオレンジジュースを」

「私も」

「わかりました。じゃあ行こうか村正」

『おつよ』

海斗たちがこの場を離れて少ししてからマリが話しかけてきた

「その・・・今日は助けてくれてありがとう」

「ん？仲間なら困っているのを助けるのは当然だろう？それに海斗だって手伝ってくれたんだし」

あたりが暗くて表情が見えない

「ん？どうしたんだ？」

「えつと・・・その・・・えーい！」

俺に抱きついてくるマリ

やっぱ怖かったのかな？そりゃ戦ったりしてるけどやっぱ女の子だ

しね

「うっ・・・怖かった・・・うっう・・・」

なんかぬれてるぞ・・・ああ、涙か

頭を撫でてやる

「大丈夫、今回はあれだったけど次からは気をつけるよ・・・俺も海斗も」

「うんっ！」

笑顔がとても可愛かった

そんな光景を見守る海斗と村正

「なるほど」

『うん、こっぴつことだ。で？マ리를狙ってたお前としてはどうなんだよ？』

「どうも何も彼女の幸せを僕は願いますよ。はぁ・・・やっぱ笑顔がとても似合いますね」

『そっか・・・ま、お前がそれでいいならいいさ・・・そろそろ戻るか』

「そうですね」

その後お礼（助けたことと、買って来てくれたこと）を言われてちよっと嬉しい

・・・きつとこのお礼には彼と二人きりにしてくれたことも入って  
るんだよなあ　と思う海斗であった

旅での出来事 その4 バカンス(後書き)

あれだね、うん

女の子の心情を考えながら書くのが苦手だっということがわかった

次なる世界へ（前書き）

新章突入キリッ

## 次なる世界へ

食べ歩きをしたりバカンスしたりと、そんな平和な世界ばかりではない

とりあえずこの世界の情勢について調べておくか  
念じる

世は異能を持つものとそうでないもので分かれている  
能力にはたくさん属性の種類がある

現在、魔王と魔物たちVS人間 という構図で戦争が起きている  
人々は生活には困っていない

・・・もういいや。とりあえず勇者のことを把握しとかなないとだな

「とりあえず、この世界で勇者やってる奴のとこまで行くぞ」  
俺はマリと海斗をこちらに寄せて転移を使う

勇者一行は山の中を歩いている  
勇者たちの進路のだいぶ先に転移する

「後は勇者一行を待つだけだ・・・飯にするかぁ。よし、焼きそばでも食うか」

そういつと異空間にしまつてある、時の流れを凍結させた焼きそばを取り出す

時の流れの凍結を解除して皆で食べる

「ん？ああ、そろそろだ」

「勇者つてどんな人だろうねー、やっぱり勇者つて言うくらいだからいい人なのかなー」

「僕はそうだと思いますよっ！だって勇者つてかっこいいじゃないですか！」

『んー、俺は勇者とかどうでもいいしなあ』

というわけで勇者たちのほうへ向かつて歩き出す  
立ち止まったら不自然だからね

そして勇者が話しかけてくる

「おや？君たちこんなところで何をしているんだい？」  
.....

とりあえずまずは勇者の容姿について説明しよう

顔は中の下

体格はデブ

身長は165cmくらい

隣にいる男性・・・こいつなんか怪しいわ

顔は中の上

体格は小太り

身長は勇者と同じくらい

その二人以外は女しかいない

「道に迷ってしまったて・・・あなたたちはいったい？」

すると勇者はマリのほうをジロジロ見ながら

「まずは自分が名乗るのが礼儀だろ？」

(こいつ怪しいな・・・)

「えっと・・・その事情がありまして名前がないので・・・」

「私はマリ、よろしく」

「僕は海斗です」

「っは・・・俺は勇者のレイドだ」

そして聞いてもいないのに隣の男も名乗る

「俺はこいつの友達のケイトだ」

・・・まあいいか

「それで、勇者さんは何をしていますか？」

「はあ？勇者『さん』だあ？勇者『様』だろ？お前らの住む世界救ってやるうとしてるんだぞ？」

「それで何をしているんですか？」  
めんどくさいのでスルー

「ツチ、今この山のとっぺんに住んでる魔女を討伐しに行くんだよ」

ほう・・・魔女？

「魔女っていうと・・・何かしたのですか？」

「っは、アホだなあお前。何もしてねえけど人の脅威になるような能力持つてるんだぜ？討伐するに決まってるんだろ」

・・・腐ってやがる

海斗とマリは黙っている

ちなみにケイトはマリをずっと見ている

「俺たち道に迷ってしまつて・・・ついていっていいですか？邪魔はしないので」

勇者はチラッとマリを見て

「ツチ、しゃあねえな」

後ろの女の子たちは皆何故か（あー・・・）みたいな顔をしている

というわけについていくことにした

その日の夜

レイドとケイトはマリにしつこく言い寄っている

そっちは放置して俺は女の子たちにあることを聞く

「ねえ。君たちちつて勇者の旅についてきてるけど・・・決して強いとかそういうわけじゃないよね？」

最初はただただ雑談をしていた。そして何気ない風を装い質問して

みる

何故か皆無言である

何かに怯えているような・・・んー、勝手に心を覗いてもいいけど・・・微妙だ

「まあ、話したくないならいいさ」

「おーいマリ、おもしろいものがあるぞー」  
なんか困っているようなので助け舟を出す

「え？何々？」

こちらに駆けてくる

勇者とケイトの舌打ちが聞こえる

皆も寝静まった頃

俺は目を眺めている

すると勇者がこちらにやってくる

「おい、お前マリの何なの？」

いきなりそんなことを聞かれた

「んー？なんだろうなあ」

「彼氏でもないなら引っ込んでろ」

「へえ、あの旅一緒にいる女の子たちは違うの？」

何も言わず去っていく勇者

しかたない・・・勇者とケイトの時間の流れを凍結して、話を聞くか

寝ている子たちをおこす

「ねえ？勇者の旅に同行している理由何？」

何も言わないなあ・・・

「ちなみに勇者とケイトなら聞いてないぞ？あいつら今止まってるから」

というわけで軽く説明しておく

説明を終える

女の子たちのうちの一人が話し始める

「私はもともとある村の村長の娘だったの。それである日勇者様が来て・・・丁度私たちの村をオーガが襲っていて、それを討伐してくださいってなんです。で、そのお礼に私と旅をしたいって・・・」  
一人が話し終わると他の子も話し始める

「それで・・・ある日勇者様に（性的に）襲われて・・・その現場を『カメラ』というもので撮られてしまって・・・それをバラ巻かれたくなかったらって・・・私は・・・ううう・・・」

まあ、そんな感じだそうです・・・ん？待てよ？マリが危ないんじゃない・・・

「なるほど、事情は把握した。それで今回の魔女討伐の目的は知っている？」

「なんでも・・・その魔女って子が可愛くて・・・私たちみたいに・

・・・

「ふーん、実力は？」

「・・・とても強いので、あのケイト様とタッグで戦って負けたところを見たことはありません」

はあ・・・まあ勇者名乗るだけのことはある。それなりの実力というわけか

「ん、ありがとう」

そして彼女たちは再び眠りに着く

とりあえず二人の時の流れを戻して・・・

とりあえず置手紙だけ残して・・・いや、マズいな

・・・朝に海斗と村正と会議だな

次なる世界へ（後書き）

ちよっと人としてどうかと思うような勇者に挑戦

## 勇者排除活動記 その1

正午

今朝、会議を開き、とりあえず勇者を粛清する方向で話がまとまったが、ただ粛清するのじゃおもしろくないので勇者一行が目指している山の頂にある魔女の住処に先回りすることにした。そこで魔女とやらに勇者一行のことを知らせ協力を仰ごう

というわけで現在山の頂にいる

俺の眼前には塔・・・だった何かがある

確かに塔だったのであるう・・・今は倒潰している

住処・・・？どこに住んでいるのだろう？

「すいませーん」

とりあえず呼びかけてみる

・・・魔法を使ってみる

「ああ、なるほど」

俺は魔女の居る位置を把握したのでそこまで転移する

「・・・誰？」

いきなり現れた俺に驚く様子はない

「いや、名前はないけど・・・」

「そう、それで何？あなたも私を殺しに来たの？」

「お前を殺しに来ようとしている連中の敵だ」

勝手に椅子を創り座る

そして事情を説明する

「そういうこと・・・でも私はあなたをまだ信用できない。だから監視をつけさせて」

「わかった」

彼女の眼が黒から紅へと変わる

「ついでだから説明しておく、私は魔界にいる72体の悪魔を使役している。使役している悪魔の能力を私が行使したり、悪魔を憑依させたりする・・・けど基本は召喚と行使。貴方には3体の悪魔をつける。それくらいいいでしょう？」

へえ・・・悪魔か。そいつはおもしろいな

side海斗

僕たちは夕方頃に山の頂へと到着した

彼は先に来ているはずなんだが・・・姿が見当たらない

『ああ、そういうことか。さて、この勇者はいつ気づくんだろうな』

村正の説明によると、こここの崩れた塔が魔方陣として機能していて、ある一定の場所に足を踏み込むと別の場所へ飛ばされるそうだ。

『あいつはきつとそこにいる。だがこの勇者気づくのかな・・・？』

すると勇者が

「あゝ、ダリイ……。しゃあねえ。ケイト何か分かったか？」

「あー・・・とりあえず、いつも通りにお前が能力使ったらいいんじゃないねえ？」

「しゃーねえか・・・あー、早く夜になんねえかなあ・・・今夜こそは・・・」

勇者の能力・・・？これは気になっている

それなりの実力者と言っていたので・・・

僕でも斬り捨てれるレベルならここで斬り捨てていこう

勇者は手を空に掲げ、言葉を発する

「クリエイト  
創造」

何か怪しい装置が出現した

それを操作しているケイト

「この塔自体に何か力があるようだ・・・あそこにあると思われる

不可視の扉ゲートを維持していると思うが・・・とりあえず、進むか」

「すごい便利ですねっ、それほかにどんなことができるんですか？  
ああ、マリさんが勇者に近づいていく・・・」

「俺の能力は創造クリエイティブ。少し条件もあるが俺の望んだものを創造する能力さ。この世に存在しないものだってつくれるよ・・・例えば・・・  
・・・これとかね、君に似合うよ」

そう言っつて勇者は何か渡した

『ッチ、俺たちに見えないように渡しやがって・・・』

・・・相手は思った以上に手強そうである

**勇者排除活動記 その1 (後書き)**

久しぶりの更新

最近何も思い浮かばなくて・・・

## 勇者排除活動記 その2

へえ・・・勇者名乗るだけの实力はあるのか  
にしても創造ねえ・・・

現在魔女とは別の場所に居る  
だが会話をしようと思えば俺の監視についでる悪魔を通して可能だ  
そうだ

「なあ、どう思う?」

「今までのとは格が違う・・・でもそれだけ」

会話は長く続かない

「そろそろ勇者のほうへ向かう」  
「了解」

・・・そういえばまだ名前を聞いてないな  
「なあ、よかつたら名前を教えてくださいませんか?」

・・・

数分の沈黙



「・・・あれはしかたなかった。能力が暴走したから・・・抑えられなくて」

・・・こちらへんは一通り聞いている

彼女はその能力が凶悪であることを親に知られ、親は彼女のことを村中に言いふらした

「ウチの子に近づくな、呪われるぞ」

村の大人たちは彼女を居なかったこととして扱う

子供たちのいじめの対象になる

彼女はそんな環境の中でそうとうまいっていた

そして精神が不安定になり、そこに刺激（悪い意味で）を与えられ能力がうんたら　とか言ってたな

「っは、これからも抑えられるなんて保証はどこにもないだろ？だから俺はお前を倒しに来た。お前の能力は人間の脅威以外の何者でもなんでもない！」

話はそれで終わりだ　と言わんばかりに彼は剣を構える

その場で剣を振るう

すると剣が巨大化し、魔女の目の前で止まる

俺はその剣の重力を操作して人間がもてないくらいに重さにする  
次に俺は海斗とマリをこちら側に引き寄せる

「なっ・・・てめえ！何しやがる！」

俺は無言である

そして二人の頭に手を置き洗脳しているフリをする

同時に二人に念話を飛ばす

(いいか？この場で勇者とケイトを殺す。魔女は味方だ)

(わかりました。それじゃ、村正頑張ろう)

(私は何をしたら・・・)

(大丈夫だ、俺らでフォローするから)

そこで念話を終了する

・・・？ケイトの姿が見えない

海斗は村正を構え、マリは能力を使用する

お互いの距離は常に一定に保たれている

カイイイン

魔女の背後で金属音が響く

「チィ、しくつたぁ！」

背後にはケイトが居た

・・・なるほど、透明化と気配を消す能力か

魔女がケイトに気をとられている隙を狙って勇者が攻撃を仕掛ける

「斬撃波」

勇者が連続で斬撃を放ってくる

俺の監視の悪魔がそれを防ぐ

「……このタッグが負けられない理由のひとつはこれか……」

……全力を出す必要はないか。

side 海斗

おかしいですね

何故彼は創造を使わないのでしょうか

……そういえば条件があるなどと言っていた気もしますが……  
正直あの能力さえ封じしてしまえば僕一人でも倒せる相手な  
のですが相手がまだ使ってこないからいつ出てくるかわからない  
……本当なら使われる前に仕留められたら良いのですが……  
もっと修行を積みまねば……

## 勇者排除活動記 その2（後書き）

・・・あれですね、ちょっと真面目に考えますよ  
ええ、名前考えてないとか 条件考えてないとか 色々ありま  
すよ

というわけで こんな能力どう？ とか こんな名前どう？ とか  
ありましたら感想のほうへ書いてくれると嬉しいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3896v/>

---

新しい何かを求めて

2011年10月13日23時34分発行